文化遺産ニュース

Cultural Heritage News

vol. 21
October 2009
from NARA

聖ポール天主堂跡（マカオ）

フィールド・ナウ●*Field Now*
世界遺産を行く　フィリピン共和国・マニラ／中国・マカオ　1-3
インターナショナル・コレスポンデントからの報告　モルジブ　4
研修レポート●個人研修・ラオス　5
●文化遺産保護指導者研修・交流プログラム　6
WALKING MAP　佐保路・南都花の古寺「不退寺（ふたいじ）」

（財）ユネスコ・アジア文化センター 文化遺産保護協力事務所

世界遺産を行く

フィリピン共和国

マニラ

Manila

フィリピンの首都マニラは、国際都市として発展し続けている一方で、スペイン統治時代の歴史文化遺産も多く残っています。今回は、世界遺産「バロック様式教会群」の一つであるマニラのサン・オウガスチン教会を中心にご紹介します。取材に際しては、ＡＣＣＵ奈良事務所の研修参加者であるマリー・アントワネットさん（フィリピンユネスコ国内委員会勤務、２００８年青年交流参加）とローエラ・レヴィラさん（サン・オウガスチン博物館勤務、２００７年青年交流参加）の協力を得て、最新の情報を伺うことができました。

1 イントラムロス

マニラの中央に位置するイントラムロス地区。ここは、スペイン統治時代（16世紀中頃～19世紀）、スペイン人の最初の永続的定住地となった城壁都市です。総延長4.5㎞の城壁に囲まれた五角形の小さな都市の中には、当時の面影を残すサンチャゴ要塞やサン・オウガスチン教会などの文化遺産が集まっています。

2 サン・オウガスチン教会

17世紀初めに完成したサン・オウガスチン教会は、フィリピン最古の石造りの教会です。スペイン統治時代に建てられたほか3つの教会とともに、**バロック様式教会群**として**1993年にユネスコの世界遺産**に登録されました。

この教会は、17世紀頃にスペインなどで広まった豪壮華麗な様相をもつバロック様式とは少し趣が異なり、頻繁に起こる地震などにも耐え得る頑丈な石造りで、要塞としての機能も併せ持っていました。

教会内では、バロック風の祭壇やステンドグラスを目にすることができます。また、教会正面には、狛犬が置かれており、フィリピンと中国との文化的交

当初からの姿を保つフィリピン最古のサン・オウガスチン教会

左端 神父、右端 マリーさん、右から2人目 ローエラさん

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館の展示をモデルに、ローエラさんが考案した展示棚。展示ケースを手前に置き、間近で展示品を見ることができるように工夫されていました。

流があったことを物語っています。「このように、400年の歴史を持つ美しい教会ですが、予算やスタッフが十分でないため、教会内部の修復が追いついていないのが現状です」と、語るローエラさん。

光を受けて輝くステンドグラスや、天井、壁に描かれた宗教画は、時を忘れて立ち尽くす美しさです。

併設するサン・オウガスチン博物館では、礼拝に使う調度品や礼服、古文書など教会が所有する品々を展示し、頻発する地震や第二次世界大戦などの戦禍を乗り越えてきた教会の歴史を今に伝えています。また、博物館二階では、教会の宗教画や外部から持ち込まれた絵画などの保存修復を行う作業室があり、学生ボランティアを中心に活動していました。

ローエラさんは、「限られた収入とスタッフの中での維持管理は厳しいですが、自ら修復作業などを行って努力しています。また、研修で訪問した奈良県立橿原考古学研究所附属博物館の遺物の展示方法を参考に、見やすい展示にするための工夫をしました」と、うれしそうにACCU奈良事務所での研修の成果を語ってくれました。

博物館内にある修復作業室

雨漏りで美しい壁画が剥がれている天井

サンチャゴ要塞

マカオ

Macau

マカオ(中国)には、ポルトガル支配時代の歴史的遺産が点在し、22の歴史的建造物と8つの広場が「マカオの歴史地区」として、2005年にユネスコの世界遺産に登録されました。街全体が歴史文化博物館といえるマカオ(澳門)の世界遺産をご紹介します。

ヤシの木が茂る庭に建つ優美な聖ローレンス教会。マカオで最もおしゃれな教会といわれています。

1 媽閣廟(マァコッミュウ)

面積が小さいマカオの街は、マカオがこれまで辿ってきた歴史を至るところで感じさせてくれます。特に、ポルトガルがマカオに東西貿易の拠点を置いた16世紀中頃以降、中国の伝統を踏襲した建造物に加え、東洋と西洋の文化が融合された建造物なども建てられ、独特の異文化共存のスタイルが形成されました。マカオ半島の南西部にある媽閣廟は、マカオ最古の中国寺院として知られています。そこには漁師の守り神である阿媽が祀られていますが、その呼び方が「マカオ」の由来になったといわれています。

2 聖ポール天主堂跡

ポルトガルの進出により、たくさんの教会が建てられました。マカオの世界遺産には、それらが数多く登録されています。中でも有名なのが、「聖ポール天主堂跡」です。17世紀に建てられた建物は、東洋一美しい教会といわれました。残念ながら、火災で焼失し、今では、教会正面の壁面のみを残すだけとなりましたが、マカオのシンボル的な存在となっています。

マカオ最古の中国寺院「媽閣廟」

聖ポール天主堂跡の石造りの正面壁には、中央の聖母マリア像の周りを囲む日本の菊の花が彫られています。長崎からマカオに渡った日本人キリスト教徒たちが、この教会の建設に携わったことを物語っているといわれています。

他にも興味深い彫刻を見ることができます。

セナド広場に面して、白を基調にした上品な外観の民政総署。ポルトガルらしさを漂わせています。

コロニアル風建造物が並ぶセナド広場

インターナショナル・コレスポンデントからの報告

モルジブ「カシュドゥ遺跡」の発掘状況

これまでACCU奈良事務所で研修を受講した人の中から「インターナショナル・コレスポンデント（現地通信員）」を任命し、当事務所と連携して各国の文化財や文化遺産保護などの最新情報を定期的に報告してもらっています。【原稿：英文】

アイシャ・モーサさん
〈モルジブ国立言語歴史研究センター所属
2007年個人研修参加〉

カシュドゥ遺跡は、モルジブで唯一発掘調査が進められている遺跡であり、モルジブで発掘されたイスラム時代以前の最も巨大な遺跡です。このカシュドゥ遺跡は、巨大な仏教僧院跡で、その起源は7世紀から8世紀にまで遡り、様々な建造物の土台部分がそのまま残されています。

1996年から1998年にわたって、ノルウェーの考古学調査団がこの遺跡の発掘を行いました。1，880平方メートルのエリアの発掘は、3段階に分けて進められましたが、発掘された範囲は広大な遺跡全体のごく一部に過ぎないと考えられており、遺跡の大部分は今もなお、今後の発掘作業を待っている状態です。

発掘された建造物は、すべてきめの粗い珊瑚石でできており、表面は石灰のしっくいによる塗りと成形が施されています。内部には、石や砂がぎっしりと詰められていました。発掘調査過程では、絶滅した亀の骨、供物とされた魚の骨、墓、土器、ビーズなどが発掘されました。他にも、大量のコヤスガイの殻の堆積物やハマグリの殻も見つかっています。

非常に残念なことに、この遺跡は発掘調査の後、保護管理といったことが一切行われずにそのまま放置されていました。日光や雨、大気汚染にさらされて、遺跡は深刻な状況にまで劣化し、コケが生え、珊瑚は変色し、自然と人的要因の両方から様々なダメージを受けました。遺跡には許可なく侵入するのを防ぐ境界壁は一切なく、ここを見学に訪れる人もいなければ管理するところもありません。保存プロジェクトを進め、この遺跡の見学および管理計画を実施することが緊急の課題となっています。

国立言語歴史研究センターの文化遺産部門は、この遺跡が直面している諸問題に対応するための計画を策定しました。そして、アメリカの支援を受けて、2009年半ばには保存修復作業が開始される予定です。この計画では、カシュドゥ遺跡のなかでもすでに発掘調査が完了しているエリアを保存し、腐食・風化を引き起こす要因から遺跡を継続的に保護することに重点が置かれています。遺跡は、ほとんどが珊瑚岩でできており、その基礎構造物をそのまま損なわずに将来的に保存していくためには、作業が必要不可欠です。加えて、遺跡の継続的な保護とより良い観察方法も必要とされています。

保存修復作業の終了後は、地元の考古学者や修復に携わる人たちがこの遺跡を発掘調査して、この国の歴史に関するさらなる情報を手に入れることができるようになる日まで、あらゆるダメージを防ぐために、遺跡に覆いがかけられることになっています。遺跡の隣には観察エリアを設置し、多くの情報を市民に提供して人々の関心を呼び起こし、それによって将来的に遺跡を保全していこうと考えられています。この遺跡がいかに重要なものであるかを地元の人々に学習してもらうための啓発プログラムも同時に行われることになっており、プロジェクトの終了後も、遺跡が保護されるようにしていきます。

個人研修 ラオス

2009年7月7日から8月6日まで、ラオスから3名の研修生を招き、研修を行いました。

ラオスには、世界遺産登録されている「ワット・プー遺跡」や「ルアン・パバンの町」をはじめ、たくさんの文化遺産があります。同国の文化遺産を保護するために、これまでユネスコや日本、フランスなどが支援してきました。しかし、ラオスが独自に文化遺産の保存修復を行っていくためには、専門家の不足が深刻な問題となっています。そこで、文化情報省文化遺産局から研修生を招き、実践的な技術研修を行いました。

土器の石膏（せっこう）復原実習

世界遺産「ワット・プー遺跡」
写真提供：Am Phon

カリキュラム（概要版）

奈良文化財研究所

講　義
「遺跡の記録方法」など

実　習
「遺物の記録方法（土器・瓦の実測、写真撮影）」、「遺構の記録方法（発掘現場で測量、実測、写真撮影）」など

臨地研修

（奈良県）
橿原考古学研究所附属博物館、法隆寺など

（他府県）
姫路城（兵庫県）、九州国立博物館（福岡県）、吉野ヶ里遺跡（佐賀県）など

研修生からのメッセージ

スリパン ブオラパンさん

日本は、遺跡の保護に積極的に取り組んでおり、どうすれば自国でもそのような取り組みができるようになるのか、自問しながら自国の遺跡保護に努めていきたいと思います。実習で習得した遺構・遺物の記録方法は、帰国後も練習を重ねながら、同僚たちに伝えていきたいと思います。

スリニャ ブンサイティップさん

日本の考古遺跡の調査・研究と保護の実情をよく知ることができました。実習で習得した技術は、帰国後の私の仕事にすぐ役立つものであり、私がまさに求めていた知識・技術を得ることができました。研修でお世話になった日本の皆さんは、私たちを温かく迎えてくださり、その礼儀正しさに感銘を受けました。

トンリ ルウォンコさん

日本では、文化遺産を保護するために、周辺環境や景観などの都市計画にも留意していることが印象深かったです。そして、多くの国民が文化遺産保護に関心を持ち、ボランティアなどに参加されていることに強い感銘を受けました。また、最新機器を考古学の分野に応用している技術の高さに目を見張りました。

奈良文化財研究所にて土器の実測実習

興福寺南大門跡にて発掘調査現場実習

文化遺産保護指導者 研修・交流プログラム

奈良大学西山教授（前列左から2人目）による講義「文化財に及ぼす大気汚染の影響」は、大変参考になりました！（研修生）　於：奈良大学

アジア太平洋地域の11ヵ国から、文化遺産保護に携わる指導者11名を招き、6月22日から7月2日まで11日間の研修を行いました。

日本の拠出金をもとに、国連大学の「新世紀国際教育交流プロジェクト」の一環として実施するこの研修では、日本の文化遺産保護に関する理解を促進するとともに、大学生や高校生との国際交流により、**若い世代のネットワークづくりを支援**しました。

琴にチャレンジ！　頑張りました！　於：一条高校

研修生からのメッセージ

ファティマ・タブゲさん（ナウル）
ナウル政府文化部　アーカイブ調査員

自国の文化を保護する必要性と重要性を学びました。私は自信を持って、失われつつあるナウル語（母国語）教育の必要性を訴え、すべての学校の教育課程でナウル語を必修科目とするなどの提案をしていきたいと思っています。

サミュエル・アンギムさん（パプアニューギニア）
西ハイランド州行政府通商文化観光部　事務官

日本は、将来の世代のために文化遺産を厳格に保存しています。私は、文化遺産の選定や州の文化財と舞台芸術を保護するため、州立文化遺産委員会の設立及び州立博物館の建設を提案していきたいと考えています。

レ・ティ・テュ・チュイさん（ベトナム）
ホイアン遺跡管理事務所遺産情報部
渉外・国際交流担当所員

ACCU奈良事務所職員の皆さんをはじめ、各国からの研修生との出会いにより、国際的な友情を育む良い機会を得ることができました。私はこの友情を大切にし、相互理解へと発展させていきたいと思います。

カリキュラム（概要版）

講　義
「文化財の保存・活用」「文化財に及ぼす大気汚染の影響」など

臨地研修
（奈良県）民俗博物館、橿原考古学研究所附属博物館、法隆寺、橿原市今井町、明日香村など
（京都府）金閣寺、二条城

交　流
◆奈良大学での講義及び学生との意見交換◆奈良市立一条高校の生徒と平城宮跡での交流及び日本文化（箏曲、茶道、華道）体験◆京都ノートルダム女子大学の学生との意見交換及び金閣寺・二条城での交流

高校生からのメッセージ

奈良市立一条高校
一年生人文科学科

会話することで、人と人は打ち解け合えるのだと気づきました。一緒に演奏した琴も、日本文化の一つとして体験できて嬉しかったです。言葉の大切さ、文化の違いの大きさを改めて知った一日でした。

三年生外国語科

研修生の国の文化などの話を聞き、皆さんがそれぞれ自国の民族文化をとても大切にされていることを知りました。私も改めて、日本の文化を学びたいと思うとともに、他国の文化を学び、国際理解を深めていくことが重要だと思いました。

一条高校の生徒から説明を受ける研修生　於：遺構展示館

Cultural Heritage News
文化遺産ニュース
vol. 21
October 2009
発行＊財団法人ユネスコ・アジア文化センター
文化遺産保護協力事務所

WALKING MAP

ACCU奈良事務所周辺の見どころ

佐保路・南都花の古寺

不退寺（ふたいじ）

平安時代の六歌仙（ろっかせん）の一人「在原業平（ありわらのなりひら）」建立の寺「不退寺」。美男子で知られる業平が、自ら本尊を彫ってここをお寺にしたのが始まりとされ、「業平寺」とも呼ばれる優美な花の寺です。

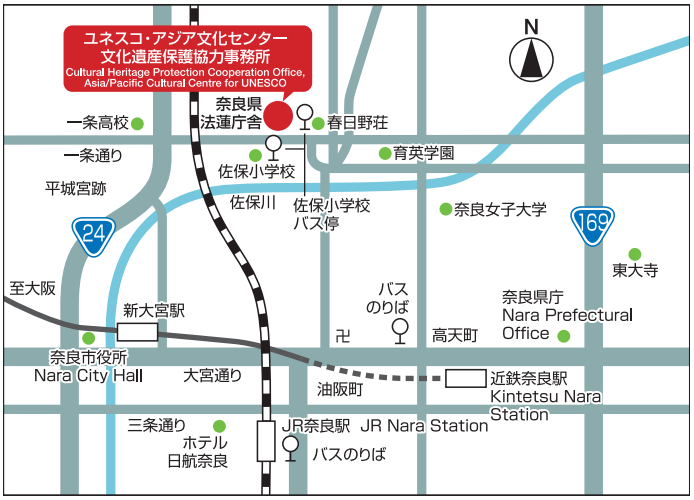
本堂には、リボンを着けた愛らしい聖観音立像（しょうかんのんりゅうぞう）や五大明王像などの重要文化財が安置されています。本堂左には、恋多き業平が縁結びを祈ったという伝説が残る「業平椿」がありました。今は、二代目「業平椿」が春に美しい花を咲かせます。不退寺は、春は椿・れんぎょう、秋は紅葉など、境内を彩る四季折々の花で訪れる人の心を和ませてくれます。

本堂

聖観音立像

写真提供：不退寺

多宝塔　写真提供：不退寺



財団法人
ユネスコ・アジア文化センター
文化遺産保護協力事務所
Cultural Heritage Protection Cooperation Office,Asia/Pacific Cultural Centre for UNESCO

〒630-8113　奈良市法蓮町757（奈良県法蓮庁舎1階）
TEL 0742-20-5001
FAX 0742-20-5701
URL http://www.nara.accu.or.jp
E-mail nara@accu.or.jp

交通アクセス

●近鉄奈良駅から
＊徒歩約20分
＊バス13番のりばから「西大寺駅行き」または「航空自衛隊行き」で、佐保小学校下車すぐ

●JR奈良駅から
＊徒歩約25分
＊バス7番のりばから「西大寺駅行き」または「航空自衛隊行き」で、佐保小学校下車すぐ